
ディヴァイダー

南 正和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デイヴァイダー

【Nコード】

N3119D

【作者名】

南 正和

【あらすじ】

精神を分割させる麻薬を世に送り出す「デイバイダー」。そしてそれを追う者達。それぞれの思いは交差し、物語は動き出す。様々な視点から浮かび上がる「デイバイダー」の正体とは・・・。

3 / 2 / 1、、

彰は時計を見ていた。黒板ではなくだ。

またあの時計ずれてやがる。お経にしか聞こえないしゃべり方の国語教師（通称、釈迦）の授業を聞き流しながらチャイムが鳴るのを待った。

誰かが校内のスピーカーを壊したのか？それとも時間が止まっちゃったのか？もしかしたら授業、いやお経を永遠に続けてオレ達を監禁するつもりかもしれない。妄想を広げていくうちにチャイムが、鳴った。

「イエエエイ！！！」

いち早く歓喜の声をあげたのはクラスのヤンキー担当、髪を赤く染めた柴田健治（通称ニワトリ）だ。お釈迦様はニワトリが鳴いたところへ一瞥をくれたがなにも言わずに授業を終わりにした。

明日から夏休みだ。しかし、高校3年とゆう時期だけに遊んばかりもいられない。部活も最後の大会が終わり、みんな受験モードに切り替わっていた。彰は夕暮れを観ながら家路についた。みんなも参考書ばかり見てないで、あの赤く染まった入道雲や、うすく静かに浮かぶ月を眺めればいいのに。受験ノイローゼなんて馬鹿らしい。

家に帰ると玄関の鍵が開いていた。働きに出ているおふくろが閉め忘れたに違いない。空き巣にでも入られたらどうするつもりなんだろう。

中に入って電話をふと見ると留守録メッセージがあった。おふくろからだ。

「友達と外食にいつてきまゝす。キッチンにカレーの残риがあるからね。」

クソババアめ。

シャツに汗が染み付いて、気持ちが悪い。シャワーを浴びようと思ったときにケータイが鳴った。最新ケータイの液晶画面を見ると意外な人物からだった。

「・・・もしもし。彰？・・・篠崎だけど・・・」

篠崎亮太は彰の中学時代の友人だったが、卒業以来メールのやりとりしかしていない。そのメールも、ここ一年はゼロに等しかった。

「亮太か？ひさしぶりだなあオイ！」

彰の目の奥に中学生の亮太の姿が浮かぶ。亮太は勉強はまったくできなかったが絵が上手くて（モネも真つ青）、バスケも上手くて（ジョーダンもびっくり）、その上顔もよかった（小池徹平にそっくり）。明るい性格で常にクラスの中心にいた。

「急に電話してくるなんて、びっくりしたぜ」

「ああ、そうか、急だったね。ごめん」

彰は不思議に思った。あの亮太があらさまに暗い。こちらだけテンションが高くてすこし恥ずかしくなった。

「で、どうしたの？」すこしテンションを下げてたずねる。

「ちよつと相談したいってゆうか・・・。その・・・マジメな話なんだけど・・・」歯切れが悪かった。「オマエなら聴いてくれると思っで・・・」

「なんだ？」かなり深刻そうだぞ、と彰は思った。

「オ、オレ、二重人格になっちゃった」

冗談ならシャワーの後にしてくれ、そう言っでやりたかった。

米沢大輔はチャイムを鳴らした。

道路は夏の陽射しに熱せられ、干からびてミイラとなったミミズが土に還ることも出来ずにへばりついていてた。公園では子供連れの主婦達が日陰で立ち話をしている。米沢は子供達が熱中症になっても気づかれないのではないかと心配になった。

インターホンの向こう側では何も反応がなかった。一ヶ月前は、呼んでおいて出ないなんて、と憤ったがもう慣れてしまった。そういえば、と米沢は思った。この家の主人の声さえ聞いたことがない配達を受け付ける電話も店長がでていたはずだ。いつものように玄関の脇に弁当を置く。幕の内弁当。代わりに玄関脇においてある小銭を受け取る。ぴつたり三百五十円。昨日はハンバーグ弁当だったはずだ。

米沢が働いている「スマイリー弁当」は配達も受け付けていて、米沢は白いスクーターに乗って弁当を運ばなければならなかった。夏場はヘルメットの中が蒸れて、気持ちよくはない。しかし楽な仕事などないのだ、と割り切って炎天下を走る。

この家は電話での注文はあるのだが、弁当を受け取った事は一度もない。ふしぎではあったが、ふしぎなことを一つ一つ調べていたらしきがない、と米沢はまたしても割り切った。謎を追っていて気が付けば人生が終わっていた、なんてことにもなりかねない、と。

米沢は、ふと過去のことを思い出した。今は別れた恋人のことだ。優子とゆう、大学教授の一人娘だった。色白の肌が、黒々とした髪と黒い大きなひとみを際立たせていた。「あなたは割り切った振りをして、物事から逃げているのよ」と彼女は言った。彼女は教授である父親の影響なのか、いつも冷静に的確な言葉を話した。米沢は「逃げているのよ」と断言されたとき、反論の言葉が見つからず苦笑した記憶がある。たしかにそうかもしれない。面倒臭がつて、逃

げているのだ。

しまった、と思った。無駄なことを考えていて、そこに立ち尽くしていた。配達時間は時間が命なんだぞ、と店長の金子にネチネチ言われるのも面白くない。金子は何故か学生にやさしくなかった。すぐに「スマイリー弁当」と書かれたスクーターに戻る。乗る前に次の配達場所を確認しているときにその男と、目が合った。

米沢が人を純粹に「怖い」と思ったのはひさしぶりだった。男、とゆうより少年と言う方が合っていると思ったのは少したってからだった。少年はの前髪は目の下までかかっていたが、暗い、そして鋭いひとみは隠せていなかった。そのひとみは真っ黒で、深く、広い宇宙を思わせた。米沢は少年から目をそらせずにいた。逃げれば追って来る獣のようでもあったからかもしれない。

「なんだよ、あんた」

その声はふつうの高校生のようで、米沢は少し安堵を感じた。「いえ、すみません、何でも・・・」ジロジロ見ていたのはこっちなのであやまる。さっさとこの場を離れたかった。スクーターに乗りうるとすると、少年が声をかけてきた。

「ちよつと待てよ」配達に行かなければならないのに、と米沢は思った。しかしそれ以上に少年のひとみから逃れたかった。

「てめえだな」と少年は言った。

「え？」と言っしかない。

「俺のまわりをうるちよろしてやがったのは」

米沢は誤解だ、とか人違いだ、と思う前に逃げよう、と思った。この人間は危険だ。

その直感は正しかった。少年がジーンズのポケットから出した手にはバタフライナイフが握られていた。少年の目は正常な人間のものではなかった。

米沢は声も出なかった。スクーターには乗らずに、走って逃げた。防衛本能に従い、走った。

恐怖で何も聞こえない。とにかく逃げるのだ。あの怪物から。

これも本能だろうか。公園に逃げた。人がいる方へ。公園の柵を飛び越えようとしたときにつま先を引っかけ、転んでしまった。慌てて後ろを見た。あの少年は踵をかえして走っていった。

米沢は夏の陽炎に少年がのみこまれていくまでその背中を見ていた。

少年が見えなくなり、安心した米沢に恐怖のため失っていた五感が戻ってきた。せみの声が聞こえる。公園をみる。何事かと目をむいた主婦達が無遠慮に米沢を見ていた。立とうとしたが腰が抜けてしまっていた。人生で初めての経験だった。

それにしても、と米沢は思った。幻覚でも見ていたのだろうか。今の出来事が現実ではないような気がした。しかし少年の目を思い出して、汗を垂らしながらも、背筋がふるえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3119d/>

ディヴァイダー

2011年1月15日15時43分発行